

義に據る山の一大勢を得るに至つた。

即ち日本労働總同盟を中心とする労働組合は空漠たる觀念闘争に没頭したる従來の態度を非とし、自ら甲ら改良的方策を利用して現實の利益を収め、組合運動の本質を發揮し、以て力を大衆の獲得に注ぐべきことを宣言した。此の運動方針の變化は自然爾餘の組合に波及して、所謂労働運動の右翼旋回を見たのである。然し故から一派の人々は此の現實政策に對して甚だ憐らなかつた。遂に大正十四年連袂脱退して日本労働組合評議會を組織した。ここに一方には總同盟を中心とする右翼、一方には評議會を中心とする左翼の両主流を生じた。更に日本労働組合同盟の中間派を生じ、大正十五年末には三派對立の勢を呈し、尚ほ地方

には全國労働組合自由聯合會の如き無政府主義系の活躍があつた。

爾來各組合互に勢力を争ひ而して急激なる社會事情の變遷と幹部相互の内紛とに依つて離合集散を重ねる間に、或は企業不振に伴ふ賃銀の低減並に解雇等に對して猛烈なる反抗を試み、或は勢力の擴張擁護を目的とする労働紛争を激成し、組織的計畫に依り罷業續出の傾向より一か、共產黨事件に際して評議會は解散を命ぜられ、最近に於ては右翼最も進出して労働運動の大勢を支配せんとする情勢にある。

工業労働者と相並んで國民生活の根幹を養ふ者は實に農民大衆である。然るに之等の農民が今や沈黙服従の封建的傳統を脱して權利と協同の叫びを擧げ、殊に